

醫學博士土肥慶藏君ノ微毒ノ起源ニ就テノ研究ニ對スル

授賞審査要旨

微毒ノ歴史上ニ初メテ出現シタノハ一四九五年ノ「ナポリ」ニ於ケル大流行デアアル。之ヲ「ナポリ」病又ハ一般ニ佛蘭西病ト稱シタ。佛王「シヤール」八世ノ遠征軍ガ輸入シタト云フ意味デアアル。微毒ノ起源問題ハ此ノ時カラ喧シクナツタ。爾後四百餘年歐洲ノ學者間ニハ未ダニ一致的解決ガ見出サレナイノデアアル。其說ハ三ツニ岐レル。

一、古代說

微毒ハ人類ト共ニ古ク石器時代ノ遺骨ニモ古民族ノ文献ニモ證明デキル

二、中古說又亞非利加說

微毒ハ亞非利加カラ中古「ムーレン」人ニヨリス歐洲ニ輸入サレタ。

三、近代說又亞米利加說

微毒ハ素ト中南米ノ地方病デアツタソレヲ「コロンブス」一行ガ「ハイチー」島(西班牙島)カラ持參シタ

土肥氏ノ研究ノ結果ハ亞米利加說ニ左袒スルノデ、而モ其ノ舉證ニハ歐洲學者ノ言及セザル方面ニ於テ幾多ノ新材料ヲ提供シテ居ルノデアアル。

一、古代說ニ對スル反駁

古代説ノ根據ノ第一ハ石器時代ノ遺骨ニ微毒性變化ヲ存スルト云フノデアアル。此ノ説ハ佛人 Parrot (1877)以來唱道サレ、日本デハ下總國古作具塚カラ發掘サレタ癒着セル下腿骨(東大人類學教室所藏)ニ就テ足立文太郎氏(1895)ガ微毒性骨肥厚タルコトヲ發表シタ。(石器時代ノ微毒(東醫會九卷明治廿八年))

西洋ニ於ケル石器時代ノ微毒性遺骨ト云フノハ佝僂病、其他デアリ、單ニ骨肥厚 Hypertrophia 象牙化 Eburisation 骨瘤 Exostose 等ノミデハ微毒ノ徵候ヲ成サヌ、微毒性ノ骨ニハ必ず星芒狀骨癩痕 Caries alca ヲ存スルト云フノガ「ウイルヘウ」(Berl. Kl. W. 1892)氏ノ主張デアアル。

土肥氏ハ病理解剖教室ニ於ケル微毒性ノ骨節ヲ調査シテ「ウイルヘウ」氏ノ説ノ正常ナルコトヲ確メ之ニ據リテ古作具塚ノ下腿骨ハ單ニ骨肥厚ヲ存スルノミニテ固有ノ骨癩痕ヲ具ヘザルモノナレバ決シテ微毒ニ非ズトノ斷案ヲ下シタ。其後「アシヨッフ」(1924?)氏土肥氏ノ微毒史ヲ讀ミテ人類學教室ノ標本ノ一見ヲ求メンレハ外傷性骨變化ナリト言明シタ。

此ノ問題ノ解決ハ極メテ重要デアアル。何トナレバ單ニ一本ノ骨ニシロ、ソレガ石器時代ノモノデアリ、且ツ微毒性デアルトスルト、日本ノ古代ニ微毒ガアツタコトニナリ、從ツテ舊大陸ノ古代微毒ガ證明サレタコトヲ意味スルノデアアルカラデアアル。

土肥氏ハ更ニ小金井敎授所藏ノ日本石器時代ノ脛骨ト古作具塚ノ下腿骨トヲ比較シテ、前者ニ固有ナ Platykrenie 側扁ヲ後者ニ於テ見出サヌニ依リ古作下腿骨ガ果シテ石器時代ノモノカ否ヤト云フコトニモ疑ヲ挿ンダ。

一九二四年新著ノ「ホールベルグ」氏微毒起源論 *Über den Ursprung der Syphilis 1924* ニ掲ゲタル所謂石器時代ノ微毒管ニ就テモ土肥氏ハ東京醫事新誌大正十四年一月及昨年伯林醫學會ニ送レル報告ニ於テ同一ノ理由ニ依リ微毒ノ特長ヲ認メナイト言明シタ。

次ニ古代論者ノ第二ノ論據タル古代諸民族ノ文献中ニ微毒ノ記載アリトノ説ニ對シテハ、土肥氏ハ専門學者トシテノ立場ヨリ、一々之ヲ辯駁シ、更ニ支那ノ歷朝ノ醫書中ヨリ聊カニテモ微毒ノ疑アル文章ヲ指摘シテ(邦文微毒史二頁參照)ソレガ孰レモ他病タルコトヲ明細ニ説明シタ同ジコトハ日本ノ古文獻ニ就テモ繰返ヘサレテ居ル。

土肥氏ノ説ノ要領ハ微毒ノ病理學ニ根抵シテ、三ツニ分ツコトガデキル。

(一)微毒ハ局處病(陰瘡)ニ非ズシテ全身病デアル。即チ下疳ニ初マリ(第一期)皮膚及粘膜ノ發疹ヲ來シ(第二期)更ニ護謨腫トナリ(第二期)終ニハ中樞神經系ヲ侵ス(變態微毒)。

從ツテ古代微毒論者ガ右文献中ニ存スル陰瘡ノ記載ノミニ依リテ微毒ノ存在ヲ斷定セントスルノハ誤リデアル。夫レヨリモ寧ロ重キヲ全身的(永正九年ノ唐瘡ノ記載デモ「ナポリ」病ノ記載デモ局處ノコトハ氣ヅイテ居ナク却テ全身ノ發疹ガ記載サレテ居ル)微候ニ置キ、且ツ夫ガ同一個人ニ於テ連續的症狀トシテ見出サレネバ意味ヲナサス。

然ルニ古代論者殊ニ其ノ最近ノ主張者タル「プロクシユ」氏 Proksch, *Geschichte der Syphilis*, 1895ノ浩瀚ナ著書中ニ詳記セル(一一―一二三頁)印度埃及希臘(二二五頁)羅馬以下ノ文献ノ如キハ、孰レモ陰部附近ニ於ケル(二八頁)箇々ノ發疹ノ記載ニ據リテ微毒ノ證據トナシ、若クハ或ル文書(殊ニヒボク

ラテス醫書、二五頁)ノ中ニ散見スル微毒類似ノ單一證候(骨痛トカ夜間頭痛トカ潰瘍トカ云フノ類)ヲ強イテ一處ニ拾ヒ集メテ、云ハバ人工的ニ一病症ヲ作り上ゲヨウトスルニ過ギナイ。決シテ「ナポリ」病發生ノ當時ノ記載ノ如キ連續セル全身症狀(大膿疱、疼痛等)ノ同一個人ノ病歴ヲ舉證シ得ナイノデアアル。(日本最古ノ微瘡ノ病歴ハ永祿六、七年(一五六七年)源介入道ノ唐瘡デアアル。ソレニモ全經過ガ三年ニ亘ツテ詳述サレテ居ル(邦文微毒史八三頁))

(二)微毒ハ結核ヤ癩ヨリモ遙ニ猛烈ナ觸接傳染力ヲ有シ一タビ或ル國民ヲ襲フト、永ク其ノ國ニ流行スル。

土肥氏ハ微毒ハ流行病デアリ、且ツ新ニ一國ニ侵入スルト、最初ハ殊ニ悪性ノ徵候ヲ呈スル事實ヲ「ナポリ」病突發時代ノ獨逸ノ惡痘(マキシミリアン帝一世ノ勅諭ヲ引用ス、一四九五年)支那ノ廣東瘡(一五〇〇年頃續醫說(五二頁)本草綱目(五三頁)微瘡秘錄ノ記事)日本ノ唐瘡(一五二一三年月海錄(七一頁妙法寺記)等ニヨリテ舉證シ若シ古民族ニ於テ微毒ガアツタトシタナラバ必ズヤ其ノ國ニ微毒流行ノ史跡ヲ見出サネバナラナイ。現ニ微毒ヨリモ傳染力ノ微弱ナ癩病スラ埃及ニ起ツテ西亞細亞ヲ經テ十字軍時代ニ歐洲ニ大流行ヲ來シタ經路ハ明カニ當該諸國民ノ史乘ニ於テ證明デキルノデア

ル。然ルニ古代論者ハ一人トシテ「コロンブス」以前ニ於ケル微毒流行史ヲ舉示スルコトガ出來ナイノデアアル。却テ曰ク微毒ハ中古ニアリテハ潜伏性假面性ニ散在シタラウト(體性第六卷三號大正十四年九月參照)而モ「ナポリ」病流行以來茲ニ四世紀殊ニ最初ヨリ特效藥ヲモ知リタルニ拘ラズ、世界文明

國中デスラ、何レノ土地ニモ微毒ノ流行ハ依然猛烈デ少シモ潜伏性散在性トナラヌノデハ無イカ。

(三)土肥氏ハ斯ク論究シタル後、更ニ歐洲ノ學者ガ土肥氏ノ說ニ對シテ「東洋ノ微毒ハ癩ノ病名ノ下ニ隠レ居ルノデナカラウカ」トノ疑惑ヲ掃メルノヲ辯駁シテ、支那ノ古醫書殊ニ隨代ノ「病源候論」(邦文史十二頁)ノ微病其ノ他アラユル皮膚發疹ノ記載ノ現代書ニモ劣ラズ正確(オプエクターフ)サヲ稱揚シ、又日本ノ妙法寺記中ニ素人ノモノセシ唐瘡ト云フ大ナル瘡出デ、其形譬ヘベ癩人ノゴトシト」(七一頁)ト癩人トノ鑑別ノ簡單ニシテ要領ヲ得タル點ヲ指摘シテ少クトモ東洋ノ文献ニ於テハ癩ハ決シテ他病ト混同サレナイ所以ヲ明ニシタ。而シテ支那最古ノ醫書タル「素問」(邦微十一頁)中ニ掲ゲラレタ癩ノ記載中ノ「不仁」即チ「アネステジ」ハ癩ト他病トノ鑑別ニ最モ重キヲ置カレツ、アルコトヲ説明シタ。

(四)東亞ニ於テ十六世紀以前ニ微毒ノ存在セヌ事實ハ移シテ以テ歐洲ニモ中古以前ニ微毒ノ存在セザリシ反證トナル。

東亞古文献ニ於テ、微毒ガ明ノ弘治末年(一五〇五年ニ終ル)ニ始マリ其ノ以前ニ見ヘナイコトハ、明ニアリテハ兪辨續醫說(1567)ガ始メテ唱ヘ日本デハ橋本伯壽(斷毒論1895)文化八年(一四〇頁以下)ニヨリテ其說ガ紹介サレタ。明治ノ世ニ至リ平出(1895)岡村(1899)富士川(1903)諸氏モ亦此說ヲ承認シタ。土肥氏ハ更ニ支那周代以後ノ水銀ヲ研究シテ(1901-5-19)其說ニ賛成シタ。

右ノ史實ヲ根據トシテ土肥氏ハ東亞ト陸路交通ノ便ガ夙ニ開ケ居ツタ西方亞細ヤ亞非利加及ビ歐羅巴ニモ古代ニ微毒ノ存在セザリシ所以ヲ高調シタ。現ニ奈良正倉院ノ御物例之六十種ノ藥種ヲ見テ

モ日本ト西方亞細亞トハ支那ヲ通シテ通商ノ道ガツイテ居タ。而シテ埃及國ノ癩ハ日本ノ神代ニモ傳播シテ居リ、(同人著皮膚科學下卷癩ノ項上卷皮膚科史日本ノ項)痘瘡ノ如キモ中央亞細亞ヨリ支那ニ入ツタノガ四世紀デ、日本ニ流行シ出シタノガ六世紀頃デアアル。

若シ微毒ガ西方諸國ニ古代ヨリアツタトスレバ殊ニ「プロクシユ」氏ノ唱フル如ク印度ニモアツタトスレバ東亞ノ古代ニ流行セズニハ居レナイ筈デアアルト土肥氏ハ主張スルノデアアル。

(五)支那ノ微毒(廣東瘡)ハ葡人ノ廣東來着以前ニ突發セシ事實竝ニ其説明

廣東瘡ガ葡萄牙人ニヨツテ廣東ニ輸入サレタトノ說ハ橋本伯壽ノ斷毒論(文化八年(六四頁))ニ始メテ唱ヘラレタ。其後船越敬祐(天保九年)ガソレヲ「コロンプス」歸航後十年目ト云ツタノヲ採ツタモノガ平出隆軒(明治廿八年)ハ葡人ノ廣東渡來ヲ一五〇四年ト斷定シタノデアアル。

然ルニ土肥氏ノ考證(六五頁)デハ葡人ハ一四九八年ニ初メテ印度「カリカット」(四六頁)ニ到着一五〇五年ニ「セーロン」島攻略、一五〇九年ニ「マラツカ」ニ到着而シテ一五二五年(六五頁)ニ始メテ廣東ニ來ツタ。即チ廣東瘡ハ葡人ノ支那ニ渡來スル以前ニ突發シテ居ル(遅クモ一五〇五ユヘ)。

土肥氏ハ當時「マラツカ」ニ支那ノ殖民(六五頁)ノ盛ニ行ハレタ史實ニ據リ、印度ニモ多クノ出稼人が居ツタモノト想像シ、ソコニ來着ノ葡人が植付ケタ微毒(早クモ一四九八年)ニ出稼(六六頁)ノ支那人ガ感染シテ、ソレヲ直接廣東ニ持歸ツタモノダラウト推定シタ。

即チ微毒ハ「コロンプス」ノ歸着(一四九三)ト共ニ、西葡兩國ニ始マリ一方ニハ陸路歐州諸國ニ傳ハリ一方ニハ「ワスコ、ダ、ガーマ」一行ニヨリ喜望峰ヲ經テ印度ニ達シ(一四九三)更ニ出稼ノ支那人ニヨリテ直

路廣東ニ傳播セシモノデアルト土肥氏ハ結論シタ。

(六)亞米利加傳來説ノ支持

亞米利加來説ヲ支持スル土肥氏ノ論據ハ左ノ數項ニ在ル

(一)「デアス」「デ、ノイスラ」「一六三三頁」ノ著書 *Malum serpentinum aus Insel Spaniola von Rodrigo Ruy Diaz de Jsla(1462-1542)*

本書ハ「コロンブス」時代ニ書カレテ、「コロンブス」一行ノ西班牙島病ヲ治療セル病歴ヲ載セ、且ツ「ナポリ」病ト異名同病タルコトヲ説ケリ。

古代論者ハ本書ヲ荒唐無稽ノ説トシテ顧ミズ。佛ノ「アストリツク」氏 (*Astruc, Morbus veneris, 1738*) 始メテ本書ヲ紹介シ近クハ「ブロッホ」氏 (*Bloch, Ursprung der Syphilis, 1901*) 亦之ヲ祖述セリ。土肥氏ハ「マドリッド」國民圖書館ニ於テ本書第二版「一五四三年」ヲ寫真「コピー」トシテ持歸レリ。實ニ微毒史料トシテ最モ信ヲ措クベキモノナリト云ヘリ。

(二)汪省之著「石山醫案」(明ノ正德嘉靖間 1520-1523) 卷ノ五揚梅毒ノ項ニ載セタル五例(内二例ノ病歴ハ確實ナラズ)ノ微毒患者ノ病歴蓋シ支那ニ於ケル最古ノ微毒例ナリ。

而シテ「デアス、デ、ノイスラ」ト同時代ニ當ル。

(三)微毒ノ特效藥トシテ賞用セラレシ「サルサ」根ハ南中米ノ産ニシテ(四三頁)及日本醫學會總會演說大正十五年「コロンブス」時代マデモ同地方ヨリ歐洲ニ輸入サル。

(四)汪石山ノ推獎セル驅微藥草薺ハ一名土茯苓又三歸來ト稱シ「サルサ」根ト同種ノ植物ニシテ其以

前ニハ其効用ヲ知ラレザリシナリ。

(五) 微毒ノ第二ノ特效藥タル水銀ノ醫療的歴史ノ研究ニヨリ(周代ニ於ケル醫制 1919 正倉院藥種考 1925) 水銀粉化ノ法ハ文献上支那最モ古ク(周末後漢) マタ印度ニアリテモ頗ル古キモ歐洲ニテハ中古亞刺比亞人ヨリ之ヲ傳ヘタリ。然モ當時ハ東西兩洋トモ微毒ニ應用シタルニ非ザルコトヲ證明シ西洋ニテモ西班牙ノ醫「ユアン、アルメナール」Juan Almenar 1502 始メテ驅微藥トシタリト云ヒ東洋ニテハ土肥氏石山醫案ノ記載ヲ以テ、輕粉(雲母狀甘汞)ノ驅微應用ノ最古史料トセリ。

日本ニテハ輕粉ノ製造ハ足利時代ニ溯ルモ只顏料トシテ使用セラレシガ、唐瘡以來俄カニ其敗路ヲ擴大セリ。之ニ關シテ土肥氏ハ輕粉ノ竈元伊勢射和ニ出張シテ調査シタリ(1920)。

是等ノ材料ヲ綜合スルニ東西兩洋ニ於ケル微毒最古史料ノ同時代ニ出デタルコト、微毒ニ特效ノ水銀ト「サルサ」根トノ應用ガ(微毒療法ノ過去及現在(大正十五年))東西一致セルコト、而シテ「サルサ」根ハ元來中米及南米產ノ植物タルコト等ヲ見出スベク之ト同時ニ微毒東漸ノ年代ガ「コロンブス」ノ歸着(一四九三)以後ニ於テシ且ツ印度、支那、日本ヘト次第ニ居ル事實ニ基キ土肥氏ハ微毒ノ亞米利加傳來說ヲ支持スルノデアロ。

土肥氏ノ論文出デ、後モ二三ノ古代論者ノ說ガ公ニサレタガ、孰レモ中古以前ノ古文書ノ中ニ戀愛ニ關係シタ疾病ノ記載ヲ斷篇零楮ノ間ニ見出シタト云フニ止マリ「ストホフ」氏ノ誤レル微毒起源論(體性六卷三號)ハ土肥氏ノ根本的論據ヲ動カスニハ餘リニ枝葉ニ過ギナイト思ハレル最近ノ古代說中最モ有力ニ見ヘシ「ストホフ」教授ノ意見スラ土肥氏ノ伯林醫會學ニ送リシ論文中ニ充分反駁シ盡サレ

テ居ル。

結

論

- 一、著者ハ古作具塚ノ下腿骨ノ微毒性ナラザルコトヲ明ニセリ。
- 二、著者ハ支那最古ノ醫書素問ヲ始メトシテ以下明代マデ文献ニ就テ微毒ノ存在セザルコトヲ専門學的ニ論斷セリ。
- 三、著者ハ西洋ニアリテハ西班牙ノ「デアス、デ、イスラ」ノ著書東洋ニアリテハ明ノ汪石山ノ醫案ヲ以テ最古ノ信用スベキ微毒史料トシテ考證シタリ。
- 四、著者ハ東洋ニ於ケル水銀ノ醫療的歴史ヲ研究シテ微毒トノ關係ヲ明カニセリ。
- 五、著者ハ草薺ヲ研究シテサルサ根ト同種タルコトヲ比較證明セリ。
- 六、是等ノ材料ヲ基礎トシテ微毒ノ舊大陸ノ古代存在說ヲ否定シテ亞米利加說ニ幾多有益ナル新史料ヲ提供シタリ。

本問題ニ對スル著者ノ研究論文

- 一、和漢ニ於ケル輕粉及爾他水銀劑ノ應用(中外醫事新報明治三十四年一月)。
- 二、微毒ノ由來ニ關スル討論(妬精瘡ノ軟性下疳ニシテ微毒ニ非ザル說)明治三十五年三月日本皮膚科學會第二會總會)。
- 三、印度醫學ト水銀(皮膚科及泌尿器科雜誌第五卷ノ一明治三十八年)

- 四、周禮ニ見エタル支那古代ノ醫制(同上第十九卷ノ三、大正八年三月)
 五、輕粉ニ就テ大正九年皮膚科雜誌第二十卷四號
 六、世界微毒史考大正十年四月刊行

七、Beiträge zur Geschichte der Syphilis, insbesondere über ihren Ursprung und ihre Pathologie in Ostasien, 1923.

八、微毒ノ起源ニ就テ「フォルベルグ」氏ノ說ヲ駁ス

九、「シンガー」氏ノ同人著ニ對スル批評ニ答フ(東京醫事新誌大正十四年一月)(體性第六卷一號)

十、「スドホフ」氏ノ誤レル微毒起源說(體性第六卷三號大正十四年九月)

十一、微毒起源問題ニ就テ古代微毒論ノ妄ヲ辯ズ(社會醫學雜誌大正十四年六月)

十二、Coup d'oeil historique sur l'héredo-syphilis et son traitement en extreme-orient, par le Dr. K. Dohi de Tokio(Conférence de la syphilis héréditaire, Paris(Faculté de Médecine, 5-6-7 Octobre 1925)

十三、K. Dohi, Zur Frühgeschichte der Syphilis. (Deutsche med. Wochenschrift, 15-17. 1926)

十四、微毒ノ過去及現在(日本醫學會大正十五年總會演說)

十五、正倉院藥種考大正十五年六月社會醫學會雜誌 The Young East: Medicine in ancient Japan, vol. II, 5-6, 1926

以上土肥慶藏君ノ微毒ノ起源ノ研究ハ材料ヲ和漢洋ニ求メ古今ノ醫書ヲ涉獵シ検査緻密立論正確ニシテ醫學及歴史ノ上ニ重要ナル貢獻ヲ成セルモノニシテ其功績顯著ナルヲ認ム。